本文章已註冊DOI數位物件識別碼

airiti Library

村上春樹『１Ｑ８４』論—神話と歴史を紡ぐ者たち—

The Weavers of Myths and Histories: On Haruki Murakami's "1Q84"

doi:10.29714/TKJJ.201212.0002

淡江日本論叢, (26), 2012

作者/Author： 内田康(Uchida Yasushi)

頁數/Page： 3-28

出版日期/Publication Date：2012/12

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.201212.0002

DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，
是這篇文章在網路上的唯一識別碼，
用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 http://doi.airiti.com

For more information,

Please see: http://doi.airiti.com

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE

最完整的學術整合查詢平台—華藝線上圖書館 ● http://www.airitilibrary.com ● Find more academic articles on Airiti Library

airiti

論村上春樹《1Q84》
—編織歷史與神話的人們—

內田　康
淡江大學日本語文學系助理教授

摘要

日本古典作品對村上春樹來說是文學初體驗之一，特別是近年來在村上的長篇小說中，也開始出現引用自《雨月物語》《平家物語》等這些他從年輕時就喜好閱讀的古典作品。而在《1Q84》當中僅被引用過一次的《古事記》的涵義，也高過於《平家物語》之上。

放進長久以來柳田國男在《妹之力》等當中所主張的稗田阿禮女性論探討的話，我們會發現，將歷史敘述當中的口述部份文字化的形成過程，與作中主角川奈天吾將《空氣蛹》重新詮釋的書寫過程相重疊，並成為在作品背後支撐規範《1Q84》作品世界的起源神話的意義。村上作品常被提到，從早期階段開始作品裡頭就有著濃厚的神話色彩，但比起散落在《1Q84》當中的神話要素，我們更不能忽略掉的是在小說中，《空氣蛹》所具有的起源神話隱喻機能，也因此天吾與青豆從「1Q84 年」世界脫離而出的結局，也提示人們能如何對抗既有的神話或歷史的可能性。

關鍵詞：《妹之力》　弑王　起源神話　歷史改寫　反文本

airiti

The weavers of myths and histories:

On Haruki Murakami's *1Q84*

Uchida Yasushi
Assistant Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

Approaching to the Japanese classics is one of the literal prototypical experiences for Haruki Murakami. In his works of recent years, he does even quote from those books such as *Ugetsu-Monogatari* and *The tale of the Heike*, which were extremely favorites from his youth. And as for *Kojiki*, although it mentioned only one time in his latest novel *1Q84*, yet we can't ignore the importance of the significance of this text in it.

In regard to the generation process of this history description by letter writing of oral expression, if we recollect the thesis talked in *IMO NO CHIKARA* by Kunio Yanagita; Hieda no Are (the narrator of *Kojiki*) was female, we can easily find out the homogeny between this text and Fuka-Eri's *Air Chrysalis* rewritten in *1Q84* by Tengo Kawana, who is one of the protagonists of the novel. And this *Air Chrysalis* supports the world of *1Q84* behind it as something like the myth about genesis. It has been pointed that Murakami's works obviously have mythical constructions even in his early pieces. But more important in *1Q84* is the metaphorical function fulfilled by *Air Chrysalis* as the myth about genesis. It makes the exodus of Tengo and Aomame from the world of 1Q84 at the end of the novel, the representation of possibility how to the mankind oppose to the existing myths and histories which incidentally oppress them.

Keywords: *IMO NO CHIKARA*: faith to the magical power of female relatives, regicide, the myth about genesis, the rewriting of history, the counter texts

airiti

村上春樹『１Ｑ８４』論
―神話と歴史を紡ぐ者たち―

内田　康
淡江大学日本語文学科助理教授

要旨

村上春樹にとって、日本古典は文学的原体験の一つであり、特に、ごく若い頃からの愛読書だった『雨月物語』や『平家物語』などは、近年長篇小説中に引用までなされるようになっている。だが『１Ｑ８４』において、ただ一度だけしか言及されることのない『古事記』も、その意義は『平家物語』以上に重要である。

この歴史叙述における口頭表現の文字化という生成プロセスは、従来柳田國男『妹の力』などで主張された稗田阿礼女性説を考え併せた場合、小説内で主人公・川奈天吾によってリライトされる作中作『空気さなぎ』の成立過程にそのまま重なり、『１Ｑ８４』の世界を規定する起源神話としての意味を、作品の背後で支えるものとなっていると考えられる。村上作品については、初期段階から小説構造に神話性が濃厚だとの指摘がなされてきたが、『１Ｑ８４』において作品内に散見される神話的要素以上に看過しがたいのは、小説中で『空気さなぎ』が起源神話のメタファーとしての機能を果たしている点であり、それによって、「１Ｑ８４年」の世界から天吾と青豆が離脱するという結末も、既存の神話や歴史に人が如何に対抗しうるかの可能性の提示たりえているのである。

キーワード：『妹（いも）の力』　王殺し　起源神話　歴史の書き換え
対抗的テクスト

airiti

村上春樹『１Ｑ８４』論
―神話と歴史を紡ぐ者たち―

内田　康
淡江大学日本語文学科助理教授

すべてはこの物語から始まっているのだ。
（村上春樹『１Ｑ８４ BOOK2』第 19 章[1]）

１．村上春樹と日本古典

村上春樹の――愛憎相半ばするかたちでの――文学的原体験の一つとして、日本古典を挙げることができる。彼が十代の頃、国語教師をしていた両親、特に父親の千秋氏から古典の手ほどきを受けたことについては、作家デビュー後まもなくから、村上龍との対談『ウォーク・ドント・ラン』[2]や川本三郎によるインタビュー「「物語」のための冒険」[3]、エッセイ「八月の庵 僕の「方丈記」体験」[4]等で夙に表明されている。

> 中学校に上がった頃から父親は僕に古典を教え始め、それは高校を出るまでの六年間ずっと続いた。万葉集から西鶴に至るまでの主要な作品は全部である。しかし思春期特有の反発もあって、僕には「古典を読む」という作業がどうしても好きになれなかった。（村上春樹「八月の庵 僕の「方丈記」体験」49 頁）

---

[1] 新潮社、2009 年、421 頁。圏点は本文のママ。以下における本作品の引用も皆 2009 年（BOOK1,BOOK2）～2010 年（BOOK3）刊の同版に基いて略記する。
[2] 講談社、1981 年７月刊。「うちはおやじとおふくろが国語の教師だったんで、で、おやじがね、とくにぼくが小さいころね、『枕草子』とか『平家物語』とかやらせるのね。【中略】でも、いまでも覚えてるんだね、『徒然草』とか『枕草子』とかね、全部頭の中に暗記してるのね、『平家物語』とか。」（123～124 頁）。また彼は後に 1990 年代になって河合隼雄との対談でも日本古典に言及する。河合隼雄・村上春樹『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』（岩波書店、1996 年）等。
[3] 『文學界』（文藝春秋、1985 年８月）34～86 頁。また本稿の注 14 も参照。
[4] 『太陽』（平凡社、1981 年 10 月）49～52 頁。

airiti

そして「その反動として異常なほどの極端さで外国の小説へと傾斜して」（同上、49 頁）いくのだが、最初の小説（『風の歌を聴け』）を読んだ何人かの人から意外にも、「文体自体は翻訳小説調なんだけど、情緒はとても日本的だという気がするな」「アメリカ人はああいう発想はしない。とくに人間同志のコミュニケーションとか、時間の経過とかに関してね」（同上、50 頁）と言われ、それもあってか、

> ちょっとした心境の変化で、昔父親に読まされた古典の幾つかをぽつぽつと読み返すようになった。もっともその数は限られていて、具体的に名前をあげるなら、「平家物語」と「雨月物語」と「方丈記」の三つだけである。気がむいた時にそのどれかを取り出して少しずつ、声に出して読んでみる。」（同上、50 頁）

とのことである。この 30 年前の習慣が現在まで続いているか否かはともかく、村上は後に自らの小説の中でも積極的に日本古典を引用し始めるようになる。2002 年の『海辺のカフカ』（新潮社）では『源氏物語』や『雨月物語』が用いられていたし、また 2009～2010 年の『１Ｑ８４』（同）の「BOOK1」で、２ページ以上にもわたって『平家物語』巻第十一「先帝身投」の原文が引かれていたことも記憶に新しい[5]。例えば小山鉄郎『村上春樹を読みつくす』（講談社現代新書、2010 年）は、1980 年代以降しばしば村上にインタビューを行ってきた著者による、作家の生の声を多く取り込んだ興味深い一冊だが、小山もこの中で、村上作品に見られる「日本的な力」の意味に注目する過程において、『雨月物語』や「古代神話」に関して各一章ずつを割くなど、彼にとっての日本古典の重要性に言及している。そこで本稿でも、目下村上文学最大の長篇小説である『１Ｑ８４』を分析するにあたり、特に言及された日本古典が作品内容と如何に

[5] BOOK1 の第 20 章「気の毒なギリヤーク人」455～457 頁。これは本作品が参考にしたという岩波文庫版（梶原正昭・山下宏明校注、1999 年、全四冊）では、『平家物語（四）』200 頁～202 頁に相当する。

airiti

有機的連関性を保っているかについて考えてみたいと思う[6]。

まず、本作で長大な引用がなされている『平家物語』については、村上自身、上記エッセイやインタビューでも好意的に取り上げているほか[7]、この小説の中での引用の意味に関しても、すでに中世文学研究者の渡部泰明による論考がある[8]。渡部は作中で『平家物語』に初めて言及がなされた以下の部分を引きつつ、これが「後に『平家物語』が出てくることの伏線になっている。というよりも、「ふかえり」が『平家物語』を暗唱することの意味づけを、あらかじめ行っているといってよいだろう。」(41 頁) とする。

> ふかえりはただ物語を語り、別の女の子がそれを文章にした。成立過程としては『古事記』とか『平家物語』といった口承文学と同じだ。(『BOOK1』第８章、180 頁)

さらに、これが「ふかえり」の「好きな作品」として再び引き合いに出された際の暗唱場面に、「先帝身投」が選ばれた点についても、

> 「先帝身投」は【中略】不可避的に選択される死が哀切に語られる、かなりインパクトの強い場面であることは間違いないだろう。<u>『１Ｑ８４』自体の内容からいっても、「リーダー」の語るフレイザー『金枝篇』の「王殺し」と関係づけたくなってくるし</u>、【以

---

[6] 但し、稿者の目的は村上春樹を安易に「日本文学の伝統」の系譜に位置づけることではない。以下の行論の過程においては、村上文学の、日本古典テクストに対する批評的な姿勢も明らかにされるはずである。

[7] 本稿注２および注 14 も参照。また村上は、本稿第３節でも触れるジョーゼフ・キャンベルの神話論の影響を受けて作られた、ジョージ･ルーカスの映画『スター･ウォーズ』シリーズ（旧）三部作の第二（エピソードⅤ）『帝国の逆襲』を、川本三郎との共著『映画をめぐる冒険』(講談社、1985 年）の中で取り上げ、「三部作の中ではいちばん地味で暗い【中略】作品だけれど、そのぶん不思議に心に残ってしまうところがある。帝国軍に追われに追われて宇宙を逃げのびていくところなんか、まるで「平家物語」」(204 頁）と述べている。村上が自分好みのストーリー展開に、『平家物語』を重ね合わせて説明するところが興味深い。

[8] 渡部泰明「平家物語、仮託、そして予言」(J.ルービン編『1Q84 STUDIES BOOK1』若草書房、2009 年)。

airiti

下略】（渡部泰明「平家物語、仮託、そして予言」44 頁。下線は引用者。以下同じ。）

と述べているように、単に物語全篇の重要なクライマックスであるに止まらず、「さきがけ」のリーダーが語る「王殺し」とも関わってくるというのは、小説の展開から言って妥当な読解だろう。それを補強する材料として、渡部は言及していないものの、フレイザーの『金枝篇』においては、「世界のバランスがその上で保たれている、支柱の先端」としての「君主の典型が、日本の霊的な皇帝「ミカド」もしくは「ダイリ」である」（上巻 164 頁）とされ、さらにその霊的な権力と世俗的な権力の分離の例として、「王殺し」とは異なる文脈ではあるが、まさに『平家物語』が描き出したところの日本の歴史が、簡略ながら提示されていることを指摘しておきたい[9]。

だが一方、ほかの箇所で渡部も指摘しているように、少なくとも現在の日本古典文学研究の立場からすれば、『古事記』や『平家物語』を単純に「口承文学」と捉えるには留保が必要なことも確かである。

現在では、『古事記』にしても『平家物語』にしても、「口承文学」（口承文芸）とは呼ばないのが一般である。口で語られたものが記されたのではなく、書かれたものを暗唱したのが基本だとされるからである。【中略】もちろん、ここでそのような国文学研究史を振り回しても空しい。口頭で語られた、いまだ十分に形を取れないでいる物語の原態、こそが強調されているのだろう。（同上、41 頁）

「もともと口承の叙事詩」という『平家物語』の成立の捉え方は、

[9] 「この国で長く俗世の権力を握ることになる大君〔将軍〕が登場したのも、あるミカドが三歳の息子のために自ら退位したことが原因である。ひとりの簒奪者が、ミカドとなった幼い皇子からその主権をもぎ取った。そこでミカドの大義を擁護したのは、気骨と実行力に富む男、〔源〕頼朝であった。頼朝はその簒奪者を倒し、ミカドにその「影」を回復してやった。つまりは権力という「実体」を、頼朝自身が確保したのである。」（上巻 173～174 頁）。引用はＪ．Ｇ．フレイザー『初版 金枝篇（上・下）』（ちくま学芸文庫、2003 年）による。

airiti

『平家物語』成立論としてはいささかナイーブに過ぎようが、『平家物語』が語りと書くことが互いに助け合うようにして成長していったことは間違いない。『平家物語』のさまざまな異本はどうして書かれたのか、などという問題にもつながるところがある。（同上、46 頁）

小説中、『平家物語』が「口承文学」（『BOOK1』180 頁）、「口承の叙事詩」（同、457 頁）と捉えられるのは、主人公の一人・川奈天吾の述懐の中に限られており、必ずしも村上春樹自身の認識と一致するものではないとも考えられるが、さしあたりここでは、登場人物の眼を通して、この歴史を描いた古典テクストが「口承」と結びつけられている点に留意したい。渡部の言う「口頭で語られた、いまだ十分に形を取れないでいる物語の原態」という理解も、そうした文脈で押えられよう。さらに、『平家物語』といえば日本文学史の中でも特に多くの異本もしくは異種本を有することで知られるが、書承の過程でかくも多様なテクストが派生した事実も、『１Ｑ８４』における「歴史の書き換え」をめぐる問題への繋がりから考えて大いに示唆的であろう。また、本小説を王権や歴史という観点から分析した論考も提出されていることからして[10]、村上自らが長きにわたって親しみ、さらにその内容自体が一つの王権の終焉を物語ると言ってよい『平家物語』と、これが如何に関わるかの検討は、『１Ｑ８４』の分析に際して重要な論点を提示するものと思われる。

但し、稿者が今回『平家物語』に劣らず重視したいと考えているのは、実は『古事記』の存在である。既に渡部によって分析の俎上に載せられた『平家物語』が、上の引用以外にも、『BOOK1』限定で

[10] 安藤礼二「王を殺した後に　近代というシステムに抗う作品『１Ｑ８４』」（『村上春樹『１Ｑ８４』をどう読むか』河出書房新社、2009 年）、小野絵里華「〈王権〉は繰り返される―『1Q84』における〈性〉と〈血〉をめぐって」（小森陽一編『1Q84 STUDIES BOOK2』若草書房、2010 年）、小松原孝文「Ｂ（ビッグ）・Ｂ（ブラザー）はもういらない―『一九八四年』と『1Q84』」（同）、木村政樹「メディアをめぐる物語―切り替えのシステム 1984／1Q84」（同）、佐藤秀明「村上春樹の「王殺し」」（日本近代文学会関西支部編『村上春樹と小説の現在』和泉書房、2011 年）等。

airiti

はあるものの何度か登場するのに対して、『古事記』について言及がなされるのは上記一回のみであるし、村上自身も、これまでの日本古典への関心は専ら中世文学や近世の『雨月物語』に強く傾いていたように見受けられる。しかしながら、『１Ｑ８４』でも引用されている幼帝安徳の入水が同時に天皇の神聖王権の根拠とされた所謂「三種神器」の「宝剣」の水没という事態を招いた、そのことを述べる歴史叙述である『平家物語』と対応させるかのように、まさに同じ王権の起源を「天孫降臨」に基いて語った神話としての『古事記』への言及が、わざわざ作中でなされている点は無視できない[11]。フレイザーの言う、「世界のバランスがその上で保たれている、支柱の先端」としての「君主の典型」が天皇である、との論理が『１Ｑ８４』に援用されうるならば、渡部が述べたような、『平家物語』に描かれた「王殺し」としての天皇の殺害は、青豆による「さきがけ」のリーダー殺害という「王殺し」の伏線としての機能を果たすのみならず、二つの「王殺し」を同一の原理に基くものであると暗示することにもなる[12]。そしてその意味するところは、「リトル・ピープル」なる力を媒介に「１Ｑ８４年」の世界というメタファーを通して語られた、古代的な天皇王権のありようにほかならない。その王権はまさに『古事記』に始まって『平家物語』に終わったのであって、「さきがけ」のリーダーこそは、その遥か後代の継承者だった、ということになろう。ならば、この王権と関わる起源神話や歴史は小説世界においていかに表象されているだろうか。『平家物語』に加えて『古事記』を切り口としつつ、如上の意味についてあらためて考えてみることで、小説『１Ｑ８４』に埋め込まれた王権と神話や歴史をめぐる議論にも、別の角度から光を当てられるのではないか。

---

[11] 記紀の記す「天孫降臨」に関わる叙述が、徐々に天皇の起源を語る神話へと変貌を遂げていった歴史的過程については、それ自体別に考察が必要であるが、本稿ではさしあたり、『１Ｑ８４』もその枠組に沿っているが如き現在の通念に従うかたちで、また『日本書紀』よりも「口承」と密接に関係しているという理由で、『古事記』を体制の起源神話として位置づけることとする。

[12] 注 10 の安藤礼二（2009）も、「レシヴァ」としてのリーダーは「折口信夫が『大嘗祭の本義』等で説いている天皇の規定そのもの」（14 頁）と指摘する。

airiti

以下、かかる問題意識に基いて論を進めていきたい。

２.「ふかえり」と稗田阿礼、そして〈妹の力〉

『１Ｑ８４』は、謎の「１Ｑ８４年」に迷い込んだ女性の殺し屋・青豆と、深田絵里子（「ふかえり」）という少女の口語りから生まれた『空気さなぎ』なる小説をリライトする羽目に陥った小説家志望の予備校数学講師・天吾の二人を軸として、物語が進んでいく。前節で引用したように、天吾の行うリライト作業は彼の中で「成立過程としては『古事記』とか『平家物語』といった口承文学と同じだ」と認識されている。『平家物語』について言えば、確かにこの作品が所謂「琵琶法師」の語りを通して享受されていった側面は否定できないものの[13]、例えば延慶本、長門本、源平盛衰記などの所謂「読み本系」と呼ばれるきわめて大部の異種本が存在することからして、その成立過程に机上での作業が関わっていたことも確実であろう。実際、村上自身も『平家物語』と並ぶ愛読書の一つとして挙げる[14]兼好の『徒然草』には、第二百二十六段に、出家遁世した「信濃前司行長」という人物が天台座主慈円の扶持を受け、「平家物語を作りて、生仏といひける盲目に教へて語らせけり。【中略】かの生仏が生れつきの声を、今の琵琶法師は学びたるなり[15]」（257 頁）との作者伝承が記されており、この説は必ずしも事実とは認められていないけれども、一面、琵琶法師による弾唱以前の作品生成に睛眼者の知識人の関与があったことを、象徴的に物語っているものとも考えられる。

他方『古事記』の場合は、その序によると天武天皇の勅を受けて「帝皇日継及先代旧辞」を「誦習」させられた稗田阿礼の誦みを、

---

[13] 兵藤裕己『平家物語の歴史と芸能』（吉川弘文館、2000 年）、同『琵琶法師』（岩波新書、2009 年）等を参照。

[14] 注３「「物語」のための冒険」（『文學界』（文藝春秋、1985 年８月））に村上自身による以下のような発言がある。「僕は『平家物語』みたいなのが好きなんです。『方丈記』とか、『徒然草』なんかも大好きなんです。『徒然草』の教訓性みたいな面も非常に好きですね。」（81 頁）。

[15] 『徒然草』の引用は新編日本古典文学全集 44『方丈記・徒然草・正法眼蔵随聞記・歎異抄』（小学館、1995 年）神田秀夫・永積安明・安良岡康作校注による。

airiti

「旧辞の誤り忤へるを惜しみ、先紀の謬り錯へるを正さむ」とした元明天皇の命で太安万侶（おほのやすまろ）が子細に採録し、「或るは一句の中に、音と訓とを交へ用ゐつ。或るは一事の内に、全く訓を以て録しつ」という苦心の末、和銅五（712）年正月に献上したとある[16]。もしこれを信じるなら[17]、阿礼が行ったのも、もともと存在していた多様な書承文献の暗誦であり、それが筆録されるまでに、天皇の意向を汲んだ「歴史の書き換え」がなされたことさえ想定できよう。しかしそれでもなお、口頭叙述の文字化というプロセスからすれば、小説『空気さなぎ』の形成過程は、『平家物語』以上に、むしろ『古事記』により近いものということになるであろう。この件に関しては既に、前節で触れた小山鉄郎が、次のように指摘している[18]。

> だが、私にはこの（稿者注：『金枝篇』の）殺される古代の王の話以外にも、この『１Ｑ８４』に非常に古代的、神話的な世界を強く感じるのだ。【中略】ふかえりの話し方自体が古代的だが、この『空気さなぎ』の成立の仕方も実に古代的だ。【中略】古代的関係はふかえりと天吾にもある。物語を語ったふかえりと、それをリライトした天吾は『古事記』における稗田阿礼と太安万侶の関係と同じである。（小山鉄郎『村上春樹を読みつくす』216 頁）

またさらに小山は、『古事記』の衣通姫（そとほりひめ）（ただし『古事記』の本文では「衣通郎女」又は「衣通王」。允恭天皇皇女・軽大郎女。父母

---

[16] 『古事記』の引用は新編日本古典文学全集１（小学館、1997 年）山口佳紀・神野志隆光校注の訓読文による。23～25 頁。

[17] 例えば近年で言うと三浦佑之『古事記のひみつ』（吉川弘文館、2007 年）、同『古事記を読みなおす』（ちくま新書、2010 年）のように、序を偽装されたものと考える立場もあるが、ここでは一般的に認識されている通説に従う。

[18] 小山鉄郎『村上春樹を読みつくす』（講談社現代新書、2010 年）参照。なお、「ふかえり」の口述した『空気さなぎ』を最初に「タイプしてインサツした」（『BOOK1』、179 頁）のが「戎野先生」の娘「アザミ」であることから、「ふかえり」と「アザミ」の二人を「稗田阿礼＋太安万侶コンビ」とする千野帽子（2009）123 頁のような見解もあるが、後に述べる稗田阿礼女性説との関連から考えるなら、天吾こそが太安万侶の役割に相応しいのではないかと思われる。

airiti

を同じくする木梨之軽太子と密通するが、軽太子は同母弟の穴穂命（後の安康天皇）との皇位継承争いに敗れて伊予へ流され、後を追ってきた衣通王ともども二人で自害する）のイメージと「ふかえり」とを重ね合わせつつ、

> ふかえりの父である深田保の友人だった戎野も天吾と最初に会った時に、深田保の姿について「身体も大きい。そうだな、ちょうど君くらいの体格だ」と天吾に述べている。【中略】もし天吾がふかえりと兄と妹であり、その雷鳴の夜に青豆が天吾の子を妊娠したとすれば、リーダーが青豆に対して、青豆は「すでに特別な存在になっている」【中略】と言う意味も分かる。【中略】この『１Ｑ８４』という作品は、このような古代までたどれる神話的な時間の中で書かれている物語だと思う。（同上、222～223 頁）

とも言っている。小山はこの後『ニーベルングの指輪』などをも引き合いに出しつつ、村上作品に認められる神話性の問題へと論を展開していくのだが、本稿では、それが『古事記（フルコトブミ）』であることの意味について、もう少し拘ってみたい。

『古事記』の序によれば、稗田阿礼の身分は天皇に近侍する「舎人（とねり）」であったとされており、舎人といえば通常は男性だが、阿礼については以前から女性、特に巫女的女性だったとの説も唱えられてきた。これは平田篤胤によって主張され（「弘仁私記序に、天鈿女命後也と見え、【中略】此を合せて案ふに、阿禮は實に天宇受賣命の裔にて、女舍人なると所思たり[19]」（『古史徵開題記』巻一之夏））、後に柳田國男が「稗田阿禮」（『妹（いも）の力』（創元社、1940 年）所収）で論じ[20]、さらに西郷信綱によっても支持されたが[21]、現在この説は大方において認められてはいない。しかしながら、『古事記』を把握する上で

[19] 引用は山田孝雄校訂の岩波文庫版『古史徵開題記』（1936 年）による。127 頁。
[20] 初出は『早稲田文學』1927 年 12 月。
[21] 西郷信綱『古事記の世界』（岩波新書、1967 年）、同『古事記研究』（未来社、1973 年）、同『古事記注釈』第一巻（平凡社、1975 年）等を参照。

airiti

の一つの仮説としてなら今でも想起されてよいと思われる。本稿は、『古事記』研究の一環として稗田阿礼の男女の区別を論証しようとするものではない。ただ、この稗田阿礼女性説に沿って『１Ｑ８４』における『古事記』の意味合いを捉えた場合、それが如何なるテクストとして立ち現れてくるかについては検討に値すると考える。

さて、稿者はかつて村上春樹の特に初期作品に登場する女性たちを〈表層的喪失〉〈伴走者〉〈深層的喪失〉の三つのパターンに分類し、物語における〈喪失〉が如何に構造化されているかについて論じたことがある[22]。これらはまた、『羊をめぐる冒険』（講談社、1982年）において語られる「あるものは忘れ去られ、あるものは姿を消し、あるものは死ぬ」（講談社『全作品』版 39 頁）という三通りの喪失にも対応し、最近の『１Ｑ８４』の「ふかえり」も、このうちの「姿を消す者」としての〈伴走者〉の役割を果たしていることを示唆した。本稿ではこの点を少しく補足したい。稿者の所謂〈伴走者〉とは、主人公の失われたものを回復しようとする過程に参与しながら、やがて多くは自らも彼の前から姿を消してしまう存在であり、『風の歌を聴け』（講談社、1979 年）における「左手の小指がない女の子」を原型とし、次第に『1973 年のピンボール』（講談社、1980 年）の「双子の女の子」や『羊をめぐる冒険』の「耳のモデル（『ダンス・ダンス・ダンス』での「キキ」）」へと発展していくものと考えられる。とりわけ「双子」や「耳のモデル」の場合に顕著なように、彼女たちは時に超自然的な能力を持ち、主人公を援助する役にまわったりもする。かかる〈伴走者〉の系譜は、一部『ダンス・ダンス・ダンス』（講談社、1988 年）の「ユキ」や『ねじまき鳥クロニクル』（新潮社、1994～1995 年）の「笠原メイ」ら 10 代の少女たちにも継承され、その先に『１Ｑ８４』の「ふかえり」も登場してくることになる。しかもこの「ふかえり」の場合、小山鉄郎が先の引用で指摘していたとおり、父である深田保――宗教法人「さきがけ」のリーダー――と天吾との身体的類似が示されることで、彼

[22] 拙稿「村上春樹初期作品における〈喪失〉の構造化―「直子」から、「直子」へ―」（淡江大學日本語文學系『淡江日本論叢』第 23 輯、2011 年 6 月）。

airiti

女は恰も天吾の実の妹であるとも受け取れるように書かれている。さらに、妹といえば柳田國男が〈妹(いも)の力〉という言葉で表現した、実際の妹のみならず妻や同族の者を含めた女性の持つ、男性を守護する霊的な力のことが思い合わされるが、『１Ｑ８４』においては、これまで〈伴走者〉の役を担っていた女性が、初めて血の繋がりのある妹であるかのように暗示されるに至ったことで、その巫女性が、柳田の所謂〈妹の力〉として解釈されうるような方向へと読者を誘導していくかの如くになっている。そして、先に取り上げたように、柳田が稗田阿礼女性説について語った論考が収録されたのも、まさに如上の問題を提起した『妹の力』であった。このような回路の中で、主人公（の一人）である天吾の〈伴走者〉である「ふかえり」は、あからさまに〈妹(いも)〉として位置づけ直され、またそれと連動するように、彼を太安万侶役に仕立てての、稗田阿礼としての彼女が語る新たな神話の筆録が進行していくかに見受けられるのである。

ちなみにこれでいくと、青豆の役回りは、「回復の可能性を含むことにより探索の対象になりうる喪失対象」としての「忘れ去られる者」＝〈表層的喪失〉であり、『１Ｑ８４』という小説は、失って忘れられていた彼女を、天吾が度重なる擦れ違いの末に回復する物語だということになろう。これも前稿で指摘したことだが、村上春樹はその初期作品において、一旦喪失した対象は基本的に回復されることがなく、その代償としてのピンボールとの再会（『1973 年のピンボール』）や、〈伴走者〉の立場にあった「ユミヨシさん」を求める対象として獲得するに至ること（『ダンス・ダンス・ダンス』）等によって、辛うじて決着をつけていた。ところが、それが『ねじまき鳥クロニクル』の妻「クミコ」や『スプートニクの恋人』（講談社、1999 年）の「すみれ」になると、主人公の主体的な行動の結果、喪失は回復の一歩手前まで描かれるようになるのであり、天吾が（さほど主体的に動きはしないものの）最後に青豆と再会する『１Ｑ８４』は、この方向の延長線上に位置づけることができる。ではこの失われた者の回復というモティーフは、本作品全体の中で如何なる意味を持つのであろうか。こうした点をも視野に入れつつ、今少し

airiti

「ふかえり」をめぐって、とりわけ彼女が天吾と協同で紡ぎ出す『空気さなぎ』と関わる問題を軸に、さらに検討を加えていこう。

３．起源神話（フルコトブミ）としての『空気さなぎ』

さて、前節での議論のように考えられるとすれば、問題にすべきは、小山鉄郎が指摘したような『１Ｑ８４』自体の持つ神話性という以上に、この小説の中で、登場人物たちによって紡がれる神話としての『空気さなぎ』と、それをめぐる人々との間のメタレヴェルでの相関関係であるということになるであろう。だが、一方でこの作品全篇自体にも、神話的要素が鏤められているのは確かなようである。そこで、少し遠回りになるが、まず『１Ｑ８４』を始めとする村上作品の神話性について確認しておくことにしよう。

『古事記』に関して、小山が取り上げていた「衣通姫」説話以外の例を挙げるにあたり、稿者は天吾と大国主神（おほくにぬしのかみ）との類似性に注目したい[23]。「稲羽の素菟（いなばのしろうさぎ）」の物語で有名な大国主は、異母兄弟たちに迫害され、母の勧めをきっかけに須佐之男命（すさのをのみこと）のいる根堅州国（ねのかたすくに）へ逃れる。須佐之男の娘・須勢理毘売（すせりびめ）と結婚した彼は、義理の父から様々な試練を与えられるが、須勢理毘売の助力によって切り抜け、無事に根の国を後にする…。これは、『日本書紀』には見えない『古事記』独自の「出雲神話」の一つとして知られているが、『１Ｑ８４』で言えば『BOOK2』の第８章以降、天吾が（血の繋がりがないらしい）父の見舞いに「猫の町」へ行きながら、父には謎をかけられるばかりで母の秘密を聞き出せず、その「オハライ」と称して（実の父かもしれない男の娘）「ふかえり」と交わった後、遂に１Ｑ８４世界を脱出するに至る箇所に、語りの順序は必ずしも同一ではないものの、話素の対応が見られるように思われる。以下、簡単に表にしてみよう。

---

[23] 大国主神については、拙稿「オオクニヌシ（大国主神）」（歴史と文学の会〔編〕『古事記小事典―古代の真相を探る』（勉誠出版、2012 年））も参照。また、第１節で触れたように、もしも「リトル・ピープル」の主宰する王権が、天照大神の権威を背景とした古代的天皇王権のメタファーだとすれば、高天原への対抗勢力としての出雲の大国主の立場は愈々天吾と重なってくると言えよう。彼は、物語る者としてのみならず物語られる者としても、『古事記』とリンクしている。

airiti

表１

『古事記』大国主神の物語	『１Ｑ８４』天吾の物語
・迫害により、須佐之男命のいる根堅州国へ逃れる。 ・須佐之男の娘と結婚。 ・義理の父からの試練。 ・須佐之男の娘の助力。 ・妻と根の国を脱出。	・父の見舞いで「猫の町」へ。 ・（義理の？）父からの謎かけ。 ・「ふかえり」と性交。 ・「ふかえり」の助力。 ・「猫の町」を脱出。 （青豆と１Ｑ８４世界を脱出。）

「猫の町」とは、もともと「ふかえり」が天吾の父の入っている海辺の療養所がある千葉県千倉を呼ぶ名称だった。ところが『BOOK3』の結末に至ると、「僕らはこれから猫の町を離れる」「私たちはこの世界をそれぞれに違う言葉で呼んでいたのだ、と青豆は思う。私はそれを「１Ｑ８４年」という名で呼び、彼はそれを「猫の町」という名で呼んだ」（573 頁）と、「１Ｑ８４年」の世界自体を指すものとなり、そこからの離脱もが「猫の町」からの脱出として語られるに至る。この『BOOK2』から『BOOK3』にかけての転換は、「ふかえり」との性交によって青豆の懐胎が齎されることとも連動していよう。また、天吾が（「ふかえり」と協同で）自ら紡ぎ出した１Ｑ８４世界から、青豆と二人で脱出するという展開は、ちょうど『世界の終りとハードボイルド･ワンダーランド』（新潮社、1985 年）での「僕」が、自分の作り出した「世界の終り」の街から、自らの分身である「影」だけを脱出させた後、「彼女」と二人で街の中にある「森」に留まる、という結末を反転させたものになっているが、これも、妻である須勢理毘売とともに根の国を脱出するという大国主神話が踏まえられていると見るなら、ある程度納得のいくものと思われる。のみならず、さらに想像を逞しくして、小学四年生の時に一度手を握っただけで、その後二十年間も相手を想い続けるという運命的な――しかし些か現実離れした天吾と青豆の愛も、『古事記』の「須勢理毘売出で見て、目合為て、相婚ひき」（81 頁）という、ほとんど

airiti

一目惚れとも言うべき記述と通底する「神話」であると考えるなら、その非現実的な設定の意味を理解することもできるのではないか[24]。

さて、かかる類似は、見つけようとすればおそらくもっと多く見つかるだろう。しかし本稿のポイントは、このような『古事記』と『１Ｑ８４』の間のストーリー上の相関性を指摘することではない。なぜなら、小山鉄郎以外にも従来から指摘されてきたように、もし神話的構造が村上作品では初期の段階から既に織り込み済みのものだとすれば、上記のような共通点のみへの注目は、『１Ｑ８４』における神話性に関して、それが単に『古事記』の神話とも重なる要素を有しているにすぎない、との見方を誘発しかねないからである。

例えば大塚英志は、『風の歌を聴け』や『1973 年のピンボール』、『ノルウェイの森』等は基本的に、『古事記』神話なら「イザナギ・イザナミ譚」、つまりギリシャ神話におけるオルフェウスの冥界訪問譚のような「行きて帰りし物語」という同一の構造を持っており[25]、それは村上が「構造から小説を導き出しているからである、ということだ。従って村上春樹の小説に神話的構造が指摘しやすいということは、柄谷（稿者注：行人）がいう「構造しかない」こととあくまで同義である[26]」と批判的に述べる。さらに大塚は、ジョージ・ルーカスが映画『スター・ウォーズ』でも参照した比較神話学者ジョーゼフ・キャンベルの単一神話論を、『羊をめぐる冒険』で村上もま

[24] なお、この設定の原型として、波瀬蘭『村上春樹超短編小説案内』（学研、2011 年）のように村上の初期短編「四月のある晴れた朝に 100 パーセントの女の子に出会うことについて」（『カンガルー日和』（平凡社、1983 年）所収）を指摘する論も多い。確かに短編の作中寓話の設定には通じるものがあるが、二人の擦れ違いで終わる結末ほか、「神話」としての作中機能の有無等、異なる点もある。

[25] 村上は 1994 年にプリンストン大学で行われた河合隼雄との対談「現代の物語とは何か」（河合隼雄『こころの声を聴く―河合隼雄対話集』（新潮社、1995 年）所収）の中でこの冥界訪問譚に言及し、「オルフェウスが黄泉の国に行くには幾つかの厳しい難関を越えないといけない。でもイザナギは行こうと思ったらすっと黄泉の国に行ってしまうわけです。その一種の、異界とこの世界との違い方というのは、西欧と日本では全然違っている」と述べている。彼が単に構造の一致だけでなく、むしろ両者の差異に注目している点に留意すべきであろう。

[26] 大塚英志『物語論で読む村上春樹と宮崎駿―構造しかない日本』（角川書店、2009 年）、50 頁。

airiti

た援用しているとし、「重要なのは、八〇年代における「構造しかない物語の復興」は、年代記＝大きな物語の復興につづく、自己実現の物語の復興の過程であった、ということだ。そして、年代記の中での「自己の実現」の物語の回復とは、要するに「国民」としての自己実現の物語の復興、いいかえれば「国民国家」の物語の復興ということにつながっていく。」（138 頁）と、その危険な可能性に対して警鐘を鳴らす。確かに、少なくとも 1990 年代後半以降の村上は、

> 僕はここのところジョーゼフ・キャンベルの『時を超える神話』と『生きるよすがとしての神話』という二冊の本を何度も繰り返して読んでいました。とても面白い本で、いろいろと啓発されるところがありました。僕らの心の中にある真の神話性とはなにかについて、鋭く考察した本です。僕の抱いてきた小説観ともかなり呼応するところがあります。（村上春樹『「これだけは、村上さんに言っておこう」』57 頁、質問 74、At8:40AM 97.9.6 [27]）

と、キャンベルの『時を超える神話』（日本語版は角川書店、1996 年）や『生きるよすがとしての神話』（同）への関心を表明しており、それがいつからかは措くとして、彼の創作の上にもその影響や共通性が現れるということは、充分ありえよう。したがって『１Ｑ８４』の場合も、物語のそこここに『古事記』にも通じるような神話的構造が見られるからといって、それだけではこの小説の特性を言い当てたことにならない。ここで再び本節冒頭の議論に戻るなら、『１Ｑ８４』において、川奈天吾＝太安万侶／「ふかえり」＝稗田阿礼というアナロジーが可能だとすれば、確かに『古事記』こそが、二人

[27] 村上春樹『「これだけは、村上さんに言っておこう」』（朝日新聞社、2006 年）。また同『CD-ROM 版村上朝日堂　夢のサーフシティー』（朝日新聞社、1998 年）、フォーラム 96 の At 8:47 AM 97.11.1、および「村上春樹ロングインタビュー」（『考える人』（新潮社、2010 年夏号））の 45 頁にも、キャンベルへの言及があり、前者では「たしかに「意識の変容」に関する部分は深い示唆に富んでいます。僕も読んでいて「ああ、これは僕が漠然と書こうとしていたことに近いな」と感じるところはありました」との見解が示されている。

airiti

の協同作業によって成立した小説『空気さなぎ』に相当するものだということになる。だが、そもそも『古事記』が日本における天皇支配の正当性を語るための起源神話であったことからすると、この新しく紡ぎ出された神話としての『空気さなぎ』が指し示すものとは、果たして何であろう。それはやはり、大塚が村上作品に対して懸念を示すような、「「国民国家」の物語の復興ということにつながっていく」ものなのだろうか。

この問題について考えるために、我々は『空気さなぎ』というテクストが「１Ｑ８４年」の世界に生きる人々にとって如何なる存在なのかに注目しなければならない。まずそれが、リトル・ピープルが影響力を持っている世界を規定すると同時に、彼らがそこに出現した起源を語ったものであることは間違いない。だが、そのテクストは同時に「反リトル･ピープル的モーメント」(『BOOK2』421 頁)を体現するものであって、この点、王権自らがその撰録を欲した(とされる)『古事記』とは、同じ起源神話でありながら大きく異なっているように見える。但し、実は『古事記』自体、先に見た出雲系の大国主神や、天皇支配の枠の中にありながら、それを逸脱する要素さえ備えた倭建命(やまとたけるのみこと)の物語などをも含んでいることから、「反天皇的モーメント」が皆無だとは言えないとの見方もできる[28]。この点は、本 2012 年で編纂 1300 年を迎えた『古事記』というテクストの評価自体を左右する極めて大きな問題であるため、たやすく結論づけることはできない。だが本書が、編纂後もその成立が正史に記載されることなく､また 18 世紀に本居宣長が登場するまでの一千年以上もの間､『日本書紀』の陰に隠れて積極的に価値が認められなかった事実を考えた場合[29]、それが単に当時の東アジアでスタンダードだった漢文で書かれたものではなかったという点のみならず、王権の起源を語る叙述でありながら同時にその反作用的な要素をも含ん

[28] 倭建命については、拙稿「ヤマトタケル（倭建命)」(歴史と文学の会〔編〕『古事記小事典―古代の真相を探る』(勉誠出版、2012 年)) も参照。
[29] 『古事記』編纂後の受容史をめぐる問題については、斎藤英喜『古事記はいかに読まれてきたか―〈神話〉の変貌』(吉川弘文館、2012 年) を参照。

airiti

でいたことにその一因を求めるのも、強ち不可能ではないのではないか。だとすれば、そうした点まで含めて、内容的な対応関係の有無に係らず、『古事記』のようなテクストのあり方をメタフォリカルに表現したものとして、『１Ｑ８４』における『空気さなぎ』を捉えることも、さほど突飛な解釈だとは言えないように思う。村上は、ロングインタビューにおける松家仁之の「われわれはいまひょっとすると、自我を含む自己の新たな組みかえを迫られる時期に来ていて、村上さんの小説が世界的に読まれているのにも、そういう背景もあるかもしれない、ということですね」という問いに、「詳しい説明はできないけど、そういうありありとした実感を持っています。「神話の再創成」みたいなことがあるいはキーワードになるんじゃないかと、個人的には漠然と考えているのですが[30]」と返している。ならば、主人公が神話的に語られる者としてと同時に神話を語る者としても作品世界に対抗的に関与するという『１Ｑ８４』の設定も、村上による「神話の再創成」の一つの試みと言えるかもしれない。

４．神話の呪縛をすり抜けて

次に、如上の議論を、『１Ｑ８４』の内容に即してさらに検討してみたい。「ふかえり」の語る『平家物語』の「先帝身投」（＝「王殺し」）に感銘を受けた天吾は、続いて彼女とジョージ・オーウェルの『一九八四年』をめぐる対話を交わす。少し長くなるが引用しよう。

> 「そう、今年がちょうど一九八四年だ。【中略】ジョージ・オーウェルはその小説の中で、未来を全体主義に支配された暗い社会として描いた。人々はビッグ・ブラザーという独裁者によって厳しく管理されている。情報は制限され、歴史は休むことなく書き換えられる。【中略】新しい歴史が作られると、古い歴史はすべて廃棄される。それにあわせて言葉も作り替えられ、今ある言葉も意味が変更されていく。歴史はあまりにも頻繁に

[30] 注 27、「村上春樹ロングインタビュー」（2010）、76 頁参照。

airiti

書き換えられているために、そのうちに何が真実だか誰にもわからなくなってしまう。誰が敵で誰が味方なのかもわからなくなってくる。そんな話だよ」
「レキシをかきかえる」
「正しい歴史を奪うことは、人格の一部を奪うのと同じことなんだ。それは犯罪だ」【中略】
「あなたもかきかえている」
天吾は笑ってワインを一口飲んだ。「僕は君の小説に便宜的に手を入れただけだ。歴史を書き換えるのとはずいぶん話が違う」
（『BOOK1』第 20 章、459～460 頁）

まず、ここで『平家物語』における「先帝身投」を描いた歴史語りが、オーウェルを媒介に「歴史の書き換え」をめぐる議論へと移っていく点について、本稿第 1 節での問題提起を振り返りつつ検討する。天吾の認識の中で「口承文学」として並置される、『古事記』と『平家物語』とは、古代的な天皇王権の起源から終焉までを縁取るものであった。そして現在、語りの場を離れて我々の目の前に置かれたこれらのテクストは、既に「書き換え」の行われた結果の産物としてある。『古事記』の場合、その編纂が「帝紀を撰ひ録し、旧辞を討ね竅め、偽を削り実を定めて、後葉に流へむと欲ふ」（序：21～22 頁）という天武天皇の意向に基くものだったことが、「書き換え」の痕跡を示すわかりやすい例だが、『平家物語』についても、残された膨大な異種本の存在が、その経緯を端的に証し立てていよう。のみならず、実は『平家物語』という作品自体が、その歴史叙述の枠組に様々な虚構を含んだものであった。例えば天皇王権のあり方に関して言うと、『古事記』および『日本書紀』の中には「三種神器」という用語も、またこれらの宝物が皇位継承儀礼と直接に関わっていたことを示す証拠も認められず、『平家物語』に描かれるように、所謂「三種神器」が皇位の象徴とされるに至ったのは、中世以降の

airiti

ことと考えられるのであって[31]、まさに記紀的な神話および歴史の「書き換え」以外の何物でもない。『古事記』でも『平家物語』でも、その神話的歴史的叙述の枠組が成立するや、それ以前の多様な神話や歴史は駆逐され、人々はその新たな「歴史」以外の歴史を認識することが困難になっていく。天吾が「ふかえり」の語りに心を動かされた後で「歴史の書き換え」が問題となるのも、渡部泰明の述べる「口頭で語られた、いまだ十分に形を取れないでいる物語の原態」と対比して、文字化されて広汎に流布することで人々の意識を組み替えてしまうその危険性を強調するためであろう。そしてその天吾は、「ふかえり」の「あなたも（歴史を）書き換えている」という一言に笑って反論する。だがこれはアイロニーにほかならない。なぜなら、彼の書き換えた『空気さなぎ』は見事に青豆を「１Ｑ８４年」の世界に呼び込み、彼自らや彼女の属する歴史をも変えてしまったのだから。それを自覚した青豆の、「すべてはこの物語から始まっているのだ」（『BOOK2』421 頁）という述懐は、まさに『空気さなぎ』の起源神話たる所以をいみじくも言い当てていたと言えよう。そこで、このような天吾の〈書く〉主体としての特権性に注目し、それを彼の新たな〈王権〉の誕生として批判する見解がある[32]。だが、これらの論考は『BOOK3』刊行前のものであるため、それ以降の小説の展開まで考慮した上で、更なる検討が必要になるかと思われる。

天吾が「ふかえり」と協同で立ち上げた起源神話は、確かに「１Ｑ８４年」の世界を規定しており、その点では、（王権の主宰者であるリトル・ピープルへの明らかな対抗的テクストであるとはいえ、）『古事記』と同様の力を持っている。その意味で、『空気さなぎ』という作中作は、それをめぐる状況を含めて起源神話のメタファーとして機能していると言ってよい。「ふかえり」という巫女は、阿礼と天武天皇との関係よろしくリトル・ピープルから「空気さなぎ」の紡ぎ方を教わったにもかかわらず、彼らの王権に仕えることを拒否し

[31] 拙稿「〈「三種神器」神話〉の生成と『平家物語』」（『筑波大学平家部会論集』10、2004 年、2～21 頁）参照。
[32] 注 10、小野絵里華（2010）および小松原孝文（2010）。

airiti

て「さきがけ」を逃亡し、やがて７年後に天吾の協力を得て小説『空気さなぎ』を完成させることになる。そして、青豆が 1984 年に至って初めて「１Ｑ８４年」の世界に入り込むことになったのも、彼女と「互いを強く引き寄せ合っていた」(『BOOK2』280 頁）天吾が、この年になって「ふかえり」の口述のリライトに手を染めたためであった。その天吾は、『BOOK3』の末尾で最終的に青豆の「信仰」する「愛」を選択し、リトル･ピープルに絡め取られる前に彼女とともに「１Ｑ８４年」の世界を離脱する。二人のこの行為の意味は、天吾による新たな〈王権〉の成立などではなく、神話やそれに規定された歴史に、より個人的なレヴェルの「愛」という「物語」を対峙させることで、そのような王権をめぐる抗争の場をすり抜け、世界それ自体に変容を齎した点にあった、と見るべきではないか。天吾に届いたカセットテープの中で､｢ふかえり｣は次のように告げている。

> **だいじなものはもりのなかにありもりにはリトル･ピープルがいる。リトル･ピープルからガイをうけないでいるには<u>リトル･ピープルのもたないもの</u>をみつけなくてはならない。<u>そうすればもりをあんぜんにぬけることができる</u>。**(『BOOK1』536 頁）

そもそも「１Ｑ８４年」とは、リトル･ピープルと「反リトル･ピープル的モーメント」とが均衡をめぐって果てしなく争い続けるという世界であった。そして、彼らの「もたないもの」とは「愛」であり、それを見つけられたからこそ、天吾も青豆も「安全に抜けることができ」たのではないか。佐藤秀明も言うように[33]、『１Ｑ８４』の作品世界においては、リトル･ピープルの意思に反して、彼らの王権の体現者そのものの「リーダー」でさえ、自ら望んで青豆に殺されることで「反リトル･ピープル的モーメント」の一翼を担うに至ることから、フレイザー的な意味での「王殺し」は存在していない。あるいはそれは「存在し損なっている」と言うべきだろうか。もし

[33] 注 10、佐藤秀明（2011）の 112 頁を参照。

airiti

仮に、天吾でも誰でも、「リーダー」を殺して自ら〈王位〉を継承していたなら、それは恐らくリトル・ピープルが王権を維持する上で願ってもないことだったろう。けれどその可能性は、「リーダー」が自分で求めた彼の早過ぎる死と、「さきがけ」が（おそらくリトル・ピープルからの指令によって）捕獲しようとした天吾と青豆、および彼らの子供の「亡命」によって、空振りに終わったはずである。たとえ３人の辿り着いた先が、もとの 1984 年ではなく、さらに「新しい謎と新しいルール」(『BOOK3』593 頁）が待ち受けている場所だとしても、そこはもはや、リトル・ピープルが力を振るう世界ではなくなっている。このような、ある意味であっけない結末は、我々に対して、時に人を呪縛する神話やそれに規定された歴史に、もとより「「国民国家」の物語の復興」とは無関係の、オルタナティヴな選択肢を通して柔軟に立ち向かい得る可能性の存在を、一種の寓話のかたちを借りて提示してくれるものとも言えるのではないだろうか。それは、例えば大江健三郎が『同時代ゲーム』（新潮社、1979 年）で行ったような、天皇制の起源神話と歴史とに別の神話や歴史を直接対峙させるという方法とは、あえて異なった戦略を選択した結果のようにも受け取れ、そこには、村上春樹が日本古典を自己の作品世界に取り入れるにあたっての、神話や歴史と人間との間の関係性に対する批評的眼差しをも認めることができよう[34]。

主要参考文献

安藤礼二(2009)「王を殺した後に 近代というシステムに抗う作品『1Q84』」『村上春樹『1Q84』をどう読むか』河出書房新社、13-18 頁

内田 康（2004)「〈「三種神器」神話〉の生成と『平家物語』」『筑波大学平家部会論集』第 10 集、2-21 頁

内田 康（2011)「村上春樹初期作品における〈喪失〉の構造化―「直子」から、「直子」へ―」淡江大學日本語文學系『淡江日本論叢』

[34] 本稿は、2012 年 6 月 23 日、淡江大學淡水校園にて行われた 2012 第一屆村上春樹國際學術研討會における発表に基き、大幅な加筆修正を施したものである。発表当日貴重な御意見を賜った方々に、心より深謝申し上げる。

airiti

第 23 輯、81-106 頁
内田 康（2012)「オオクニヌシ（大国主神)」「ヤマトタケル（倭建命)」歴史と文学の会〔編〕『古事記小事典―古代の真相を探る』勉誠出版
大塚英志（2009)『物語論で読む村上春樹と宮崎駿――構造しかない日本』角川書店
小野絵里華（2010)「〈王権〉は繰り返される―『1Q84』における〈性〉と〈血〉をめぐって」小森陽一編『1Q84 STUDIES BOOK2』若草書房、18-42 頁
河合隼雄（1995)『こころの声を聴く―河合隼雄対話集』新潮社
木村政樹（2010)「メディアをめぐる物語―切り替えのシステム 1984／1Q84」小森陽一編『1Q84 STUDIES BOOK2』若草書房、75-105 頁
キャンベル,ジョーゼフ（1996)『時を超える神話』角川書店
キャンベル,ジョーゼフ（1996)『生きるよすがとしての神話』角川書店
小松原孝文（2010)「B（ビッグ）・B（ブラザー）はもういらない―『一九八四年』と『1Q84』」小森陽一編『1Q84 STUDIES BOOK2』若草書房、43-74 頁
小山鉄郎（2010)『村上春樹を読みつくす』講談社現代新書
西郷信綱（1973)『古事記研究』未来社
斎藤英喜（2012)『古事記はいかに読まれてきたか―〈神話〉の変貌』吉川弘文館
佐藤秀明（2011)「村上春樹の「王殺し」」日本近代文学会関西支部編『村上春樹と小説の現在』和泉書房、109-117 頁
千野帽子（2009)「200Q 年の文藝ガーリッシュ。 村上春樹『1Q84』／ふかえり『空気さなぎ』を勝手に読む」『村上春樹『1Q84』をどう読むか』河出書房新社、119-125 頁
波瀬蘭（2011)『村上春樹超短編小説案内』学研
兵藤裕己（2000)『平家物語の歴史と芸能』吉川弘文館
フレイザー,Ｊ.Ｇ.（2003)『初版 金枝篇（上・下)』ちくま学芸文庫
三浦佑之（2007)『古事記のひみつ』吉川弘文館

airiti

村上春樹・川本三郎（1985）『映画をめぐる冒険』講談社
村上春樹・村上龍（1981）『ウォーク・ドント・ラン』講談社
柳田國男（1940）『妹の力』創元社
渡部泰明（2009）「平家物語、仮託、そして予言」ジェイ・ルービン編『1Q84 STUDIES BOOK1』若草書房、39-59 頁

◇2012 年 10 月 30 日受理 ◇2012 年 12 月 10 日審査通過